九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

在日留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究の総括

呉, 暁良
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

https://doi.org/10.15017/1806666

出版情報：地球社会統合科学研究. 6, pp.29-39, 2017-02-28. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』６号 29～39
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.６ , pp. 29～39

在日留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究の総括

呉（ゴ） 暁良（ギョウ リョウ）

１．はじめに

グローバル化の進展に伴って、ヒト・モノ・カネの流動性が著しく高まってきている。高等教育の領域においても、大学のグローバル化がますます進んでおり、２国間、多国間における学生移動が年々増加しつつある。ユネスコ統計研究所によると、2012年時点、海外で学ぶ学生は400万人を超えている。また、日本学生支援機構の統計によると、2015年日本で学んでいる留学生は20万人以上となっている。さらに、日本政府は2008年に「留学生30万人計画」を発表し、日本への留学生を2020年までに政策発表現在の14万人から30万人に増やすと計画している。「留学生30万人計画」の発表により、日本国内において国際コースの設置などの高等教育の改革や留学生に対する様々な支援が展開され始めている。

留学生は慣れた環境を離れ、異文化社会において、言語、経済、勉学、健康、就職、友人など様々な問題を抱えている（久野2001）。そのうち、高井は「適応の第一の障害は明らかに対人関係である」(1989：145）と指摘し、留学生に言語面、経済面、勉学面などの支援を提供すると同時に、人間関係面においても支援を提供する必要についての示唆を与えている。留学生が人間関係の構築においてどのようなサポートを求めているのかを明らかにするため、留学生の人間関係に関する検討が不可欠である。

人間関係の構築は留学生の異文化適応や留学の満足度と深く関わっており、その重要さについてはすでに数多くの先行研究で言及されてきた。田中（1998）は、異文化間の対人関係形成は問題解決の効果的アプローチであり、また心理的な適応を導く機能があるとその意義をまとめている。松下（1999：16）は留学生の人間関係ネットワーク構築の意義について、「留学の成功の鍵は人間関係のネットワークの構築だと言っても過言ではない。人間関係を広げることは言語、文化、心理、留学生が構造的に抱える問題を解決するための社会的発言力など、多くの面で相乗的に効果がある」と述べ、Blake et al.（2011：282）は、留学生のソーシャル・ネットワーク構築は留学生の異文化適応や留学満足度、ソーシャル・サポート、留学の成功などにとって最も重要な要素の一つであると指摘している。また、Bart et al.（2014：165）は、留学生のソーシャル・ネットワーク構築が「留学生の学習成績や留学の満足度の向上、退学数の減少などにつながっている」とその正の効果を認めている。さらに、Bart et al.（2014：167）は、先行研究を考察した上、同文化圏の友人のみならず、ある程度の数のホスト国学生の友人を有すること、ほかの学生との同居、何らかの学習組織、学生会のメンバーになること、もしくはスポーツクラブへの参加といったことが留学生の適応、全体的な幸福感と学習成績の向上に影響を与えていると報告している。

上述のとおり、留学生のソーシャル・ネットワークの果たす役割として、留学の満足度や異文化適応への肯定的効果について多くの報告がなされている。日本においても数多くの留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究が行われてきている。しかし、これらの研究を関連づけ、体系的に考察されているとは言い難い。日本において留学生のソーシャル・ネットワークの課題を明確化し、今後の方向性を示すためには、留学生のソーシャル・ネットワーク研究に対する全体的かつ総合的な考察が必要である。留学生のソーシャル・ネットワークの全体像を明らかにすることによって、留学生へのソーシャル・サポートの改善策に対して示唆を与えることができると考える。

そのため、本稿は在日留学生のソーシャル・ネットワークに関する先行研究を総括し、先行研究が留学生のソーシャル・ネットワークについて何を明らかにしたか、どのような課題が残されているか、今後どのような方向性で研究を進めていくべきかについて検討することを目的とする。

留学生のソーシャル・ネットワークについて、先行研究で友人関係、交友ネットワーク、対人関係、ソーシャル・ネットワークなど多くの用語が使われているが、本稿では、留学生のソーシャル・ネットワークという用語を用い、大学において留学生が同国人、ホスト国の学生、

他国の留学生との友人関係を指す。なお、先行研究を検討する際は、先行研究で使用されている用語に関しては先行研究通りに使用することにする。

2．留学生の友人機能モデル

留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究は1970年代から欧米が主導的に研究してきた。遡ると、Bochner et al.（1977）の留学生の友人機能モデル研究から発展してきたと言える。

ハワイ大学のアジア系寮生を対象に調査を行ったBochner et al.（1977）では、友人の国籍によって三つのタイプのネットワーク（mono-cultural networks、bi-cultural networks、multi-cultural networks）があり、それぞれが異なる機能を持つことを明らかにし、留学生の友人機能モデルを打ち出した。“mono-cultural networks”（単文化ネットワーク）は、同じ国から留学している者との間に形成され自文化の価値観を共有する機能を持ち、“bi-cultural networks”（二文化ネットワーク）は受け入れ国の者との間に形成され勉強や留学に必要な諸手続きをスムーズに遂行する機能を持ち、“multi-cultural networks”（多文化ネットワーク）は他国からの留学生との間に形成されるものでレクリエーションの場を提供する機能を持つ。同研究では留学生の多くは、ホスト側の学生との交流が少なく、同国人とのつながりが強いことも明らかにしている。

また、Furnham et al.（1982）は英国内の留学生400人を対象に調査し、英国人の友人を持つ者はわずか18%で、同国人でかつ同言語の友人39%や、同国人・英国人以外の外国人の友人38%に比べて低いという結果を報告し、機能モデルを支持した。Furnham et al.（1985）はBochner et al.（1977）の研究をさらに発展させ、“mono-cultural networks”（単文化ネットワーク）の範囲を同じ出身国から同文化圏、宗教、言葉、地区など同じ特徴を持っている学生をco-nationalと取扱い、ロンドン大学及びその他の高等教育機関で学ぶ留学生165名に対して調査を行い、Bochner et al.（1977）の機能モデルを支持した。

Bochner et al.（1977）の機能モデルに対して、工藤（2003）はこのモデルが留学生の友人関係の類型化に成功し、異文化適応との関連で留学生とホストとの接触を重視する研究者が多いなかで、留学生の文化的アイデンティティの維持とそれによる精神的安定を理由に同国出身者の友人の重要性を実証的に示したという二つの成果を評価するとともに、以下の問題点を指摘した。一つ目は、留学生とホストの関係の機能について説明ができないことである。ホストとの関係について、工藤（2003：97）は「留学生はホストとの関係を望んでいるにもかかわらず困難を抱えているのか、あるいは、留学生はホストとの親しい友人関係を期待していないのかが分かりにくい」と指摘している。二つ目の問題点は、Bochner et al.（1977）の研究が「留学生の文化的アイデンティティは固定的で同文化出身者との友人関係によって形成され維持されるという前提である」ことである。そこで、工藤は「多文化アイデンティティ」（multicultural identity）と「異文化アイデンティティ」（intercultural identity）を獲得する人の存在を示し、「文化的アイデンティティの調節は固定的ではなく、動的で可変的な過程であるという認識に立って留学生の異文化体験が調査されるべきである」と提言した。

上記の問題点を踏まえ、Bochner et al.（1977）の機能モデルを再評価するため、工藤（2003）はオーストラリアの大学で学ぶ日本人留学生６人に半構造的個人面接による事例研究を実施し、①社会的欲求の充足機能、②支援機能、③異文化学習機能、④文化的アイデンティティの調節機能という四機能を抽出した。①～③はBochner et al.（1977）の機能モデルと一致しているが、④は留学生が異文化での生活によって不安定になりやすい文化的アイデンティティを友人との交流を通して調節する機能で、工藤によって新しく提案されたものである。

以上、留学生の友人機能モデル研究を概観してきた。上記の研究結果を通して、留学生のソーシャル・ネットワークは類型化されているが、研究地域や研究対象は異なり、その機能モデルがどの国においても共通するとは考えにくい。留学生の出身国や留学先の状況によって、留学生のソーシャル・ネットワークにも違いがあると考えられる。

3．留学生のソーシャル・ネットワーク

3．1　ソーシャル・ネットワークの構成

日本において、留学生のソーシャル・ネットワークの研究が始まったのは、1990年代の田中と横田の諸研究からと言える。

田中他（1990a）では在日外国人留学生450名を対象にソーシャル・ネットワーク成員の比率について調べた。具体的には、日本で調査対象者にとって「大切な関わりのある人」を最大10人までリストアップさせ、集計を行った。その結果、全体の構成比から、ネットワーク成員の比率は、日本人（60.3%）、同国人（33.9%）、他の外国人（5.8%）の順に多く、またこの傾向は、北米、欧州、オセアニア地域を除くすべての出身地の留学生に共

通していることが示された。

また、田中他（1990b）では、18名の新渡日留学生の一学期間（３か月）における友人関係ネットワークについて調査した結果、国籍別では、日本人が52.9%、次いで同国人が31.4%、他の外国人が15.7%であり、田中他（1990a）と一致する結果を示した。友人から期待できる援助の分布では、日本に関することや情報は日本人から、物・お金などの物的支援については同国人から援助される傾向があることを明らかにした。しかし、機能モデルで言及した他国の留学生とレクリエーションの場を提供する機能は以上の研究結果から見られなかった。

さらに田中他（1991）は留学生のソーシャル・ネットワーク形成について縦断的に研究するため、半年が経過した時点で田中他（1990b）での研究対象者に対して、調査を行った。調査の結果、国籍別では、日本人が50.3%、同国人が33.6%、他の外国人が16.1%であり、田中他（1990a）、田中他（1990b）の結果と一致している。友人から期待できる援助の分布について、日本語、日本文化、情報、勉強では日本人の援助が、楽しみ、物・お金では同国人の、相談では同国人と日本人の援助が多い傾向があるとの結果である。また、半年が経過した時点の結果も機能モデルで言及した他国の留学生の機能は見られなかった。

以上、田中他によって日本で行った３件の研究は、いずれも留学生のソーシャル・ネットワークが日本人、同国人、他の外国人の順に多く、Bochner et al.（1977）の機能モデルで示されている同国人、ホスト国の者、他の外国人の順とは異なる結果を報告している。また、友人機能についても、特に他の外国人の機能は明らかにBochner et al.（1977）の機能モデルと異なっていることがわかった。このことから、Bochnerらがイギリスとハワイで行った調査によって明らかにされた留学生の友人機能モデルは日本では適用しない可能性があると言える。両研究の結果の違いを踏まえると、留学先の状況や留学生の構成などが国によって異なり、地域別に留学生のソーシャル・ネットワークや友人機能についても検討する必要があると考える。

上記の田中の３件の研究では、留学生のソーシャル・ネットワークがいずれも日本人、同国人、他の外国人の順に多いという結果が得られているが、横田（1991a）、横田（1991b）の研究では異なる結果を報告している。

横田（1991a）は留学生と日本人学生の親密化および人間関係について、日本人学生242名、留学生162名に対してアンケート調査を実施した結果、留学生同士と比べて、日本人との友人関係が明らかに少なく、留学生と日本人学生の間での親密化は、留学生同士あるいは日本人学生同士のそれに比べて、より難しくなっていると報告している。

また、横田（1991b）は日本人学生238名、アジア系留学生128名に対して質問紙調査を行った結果、日本人学生は、留学生よりもむしろ自己閉鎖的にみえるが、親密な友人を少なくとも一人は持っている者が多く、その関係の中ではかなり深い開示がなされているのに対して、留学生では、日本人学生よりもはっきりと意見を述べようとする傾向があるが、日本での学生間友人関係では、充分に開示できるような関係ができていないことが明らかとなった。また、留学生は留学生に、日本人学生は日本人学生により深く開示しているという友人構成がみられ、留学生でも日本人でも同国人との友人付き合いが深いとされている。

横田・田中（1992）は居住形態が留学生の友人形成にどう影響しているかを調べるために、外国人留学生273名に対して質問紙調査を実施した結果、Bochner et al.（1977）の機能モデルが自文化の共有など部分的に確認されたが、同時にいくつか独自の特徴も見られた。その違いは、学問遂行を円滑にする機能に関してBochner et al.（1977）の研究ではホスト国の者が同国の３倍あるいはそれ以上であったのに対し、横田・田中（1992）の調査ではほぼ同数であること、レクリエーション機能に関して同国人の占める率（46%）がBochner et al.（1977）の結果より高いことである。

以上の横田の２件の研究から、留学生は同国人との友人関係が深く、また自己開示についても日本人学生より、同国人に深く開示していることがわかる。また横田・田中（1992）の結果から調査地域によって機能モデルは異なっていることが覗える。上述の研究で異なった結果が得られた原因は、調査方法や調査対象者、調査時期の違いだと考えられる。留学生の出身国は多様であり、異なる文化背景を持つ留学生の構築しているソーシャル・ネットワークも一様ではない。湯（2004）が「留学生の文化背景、生育環境、受けてきた教育などによって、彼らの要求や日本の生活で遭遇する問題が異なることが十分予想できる。研究対象をある特定の文化圏あるいは出身国地域の留学生集団に限定することが必要とされている」と述べたように、留学生のソーシャル・ネットワークを検討する際は、留学生の出身国別に検討する必要があると考える。

３．２　要素別ソーシャル・ネットワークの検討

留学生のソーシャル・ネットワークに影響する要素として、留学生の出身国や地域のみならず、来日期間や居住形態、留学生個人の主観的姿勢などによる違いについ

ても先行研究で検討されてきた。

３．２．１　出身国

留学生の出身国や地域による研究は、木村・中込(2003)、村上(2005)、戦(2007)、Dewey(2011)などが挙げられる。木村・中込(2003)、戦(2007)は在日中国人留学生を対象に、村上(2005)、Dewey(2011)は在日アメリカ人留学生を対象に留学生のソーシャル・ネットワークについて検討した。

木村・中込(2003)は中国人留学生と日本人学生がどの程度まで交流しているかについて調べ、中国人留学生と日本人学生の交友関係について、中国人留学生から日本人学生に対する「片方的な」交友関係のみが存在していたこと、相互交友関係が認められる場合、中国人留学生と日本人学生との関係が「多対一」になっていることを明らかにした。

戦(2007)は留学生と日本人学生の友人関係の特徴に着目し、大学における日本人学生と留学生が、自国の友人、異文化の友人に対して、それぞれどのような付き合い方をしているか、両方の間にどのような相違点があるかなどについて、中国人留学生57名、日本人学生87名に対して質問紙調査を行った結果、日本人学生と中国人留学生は共に自国の友人数が多く、自国の友人と交流する頻度も高く、より親しい関係を持っているが、相手国の友人と浅い関係にとどまっていると指摘した。

上記の中国人留学生を対象にした研究は、中国人留学生と日本人学生の「多対一」な関係や、中国人留学生が日本人学生と浅い関係にとどまっていることを明らかにしたが、アメリカ人留学生を対象にした村上(2005)、Dewey(2011)の研究では、これと異なる結果が得られた。

村上(2005)はアメリカ人の短期留学生を対象に日本人との親密化について調査した。その結果、留学生のソーシャル・ネットワーク構成は、日本人の割合が半数を占め、留学生はホストファミリーなど接触頻度の高い人との親密な関係を築いており、比較的に難しいと言われてきた日本人との関係がある程度構築されていたと報告している。

Dewey(2011)は日本における204名のアメリカ人留学生を対象に質問紙調査を行った結果、留学生の多くは大学のクラブやチームなどの活動に参加することで、日本人学生と友人となることを通してソーシャル・ネットワークを形成していることを報告している。また、友人と一緒に過ごす時間が最も重要であり、それはソーシャル・ネットワーク形成の促進要因としても抑制要因としても働くことを明らかにした。

中国人留学生とアメリカ人留学生は文化圏が異なり、在日留学生の数にも大きな差があり、それぞれ別の特徴を持っているグループと言える。このような相違によって留学生のソーシャル・ネットワークが異なることが上記の先行研究の結果から見とれる。横田・田中(1992)でも欧米出身の留学生は圧倒的に日本人を友人に選び、同国人を選ぶ率が低いのに対して、中国人は同国人を選ぶ率が最も多いとの結果が報告されている。

３．２．２　居住形態

留学生会館、寮、アパートなど居住形態の違いによって、留学生のソーシャル・ネットワークにも大きな違いがあると予想される。居住形態による友人関係の違いは横田・田中(1992)、田中・横田(1992)で検討されてきた。

横田・田中(1992)では留学生会館、寮、アパートに住む留学生のソーシャル・ネットワークを調べた結果、留学生の友人構成は留学生の居住形態に大きく影響されており、日本人との交友は寮生で最も多いと報告している。

また、田中・横田(1992)では同調査結果を用いて居住形態別に留学生のストレスを分析し、寮生の「外国人の特別視」や「日本人の話題の理解」、「日本人による無視」のストレスが高いことを明らかにした。この結果は、寮生が日本人学生との共同生活でこうしたストレス場面に遭遇する頻度が高く、日本人との関係の難しさを感じていることを示唆している。これについて、田中・横田(1992)は「日本人学生と一緒に住むことは、日本人と対比されることからくるストレスが高いが、情報を得やすいなど日本人の存在から利益も得ている」と指摘している。

近年、「混住寮」が数多くの大学で設置されてきたことは、居住形態という留学生と日本人学生が交流する環境の重要さを反映していると考える。江淵(1991)でも居住形態について、「留学生と日本人学生とを分けるのではなく、留学生と日本人学生が一緒に住む、「統合主義」を取り入れた居住形態が望まれる」と提言している。

３．２．３　来日期間

古川他(1983)では大学新入生入学後安定したネットワークを形成するには数か月を要したという。留学生も同様に、新環境においては、自分のネットワークの構築には時間の経過が必要となる。田中他(1990b)、田中他(1991)、高井(1994)では縦断的な研究を通して、来日期間による留学生のソーシャル・ネットワークの違いを検討した。

田中他(1990b)、田中他(1991)は留学生のソーシャ

ル・ネットワーク形成について縦断的に研究するため、18名の研究対象者に対して３か月時点と半年時点に調査を行った。その結果は３．１で示しているように、留学生のソーシャル・ネットワークの構成は２回とも日本人、同国人、他の外国人の順に多かった。この結果は留学生のソーシャル・ネットワークは３か月時点から友人の文化圏ごとに分かれる傾向があったということを示唆している。

高井（1994）では留学生の適応を時系列的に追うために、42人の留学生に対して、縦断的な調査を行った。留学生の最も重要なソーシャル・サポートの供給源を調べた結果、全体的に最も頼られるグループは、まず同国出身者、次に日本人、そして他国出身者の順である。「情緒的サポート」（相談、共感など）に関しては、一次調査では同国出身者、日本人、他国出身者の順になるが、二次調査では日本人、同国人、他国出身者の順になっている。また、「道具的サポート」（金銭、手伝いなど）に関しては、一次調査では同国人出身者は50％を占めたのに対して、二次調査では39％までに下がっている。一方、他国出身者の割合は一次調査より増加するという結果が得られた。

上記に示したように、留学生のソーシャル・サポート源は時間の経過につれて変化しており、ソーシャル・ネットワークの構成も静的なものではなく、動的であることがわかる。そのため、在学期間などを視野にいれて留学生のソーシャル・ネットワークを動的に捉え、留学生のソーシャル・ネットワークを検討する必要があると考える。

３．２．４　留学生の主観的姿勢

留学生の出身国、居住形態などの物理的な要素のほか、留学生個人の主観的姿勢といった心理的な要素も留学生のソーシャル・ネットワーク構成に影響すると考えられる。これについて、貫田・ウリガ（2013）は日本の大学で学ぶ外国人留学生は、どのような友人関係を形成しながら日頃の学生生活を送っているかを明らかにするため、留学生たちを友達付き合いに対する熱心さに基づいて二つのグループに分け、アンケート調査を実施した。調査の結果、高社交群の留学生は、留学以前からもともと社交的なパーソナリティをもつ人物である傾向が強いと同時に、異文化交流に対する熱意も強く抱いており、外国人の友人を多く作りたいと考えているが、低社交群の留学生は、量的にも質的にも対照的な交友ネットワークを形成しているとしている。また、友達付き合いに特に熱心な層と、さほど熱心ではない層との間での比較を通じて、留学生の交友ネットワークの構成のされ方は決して一様ではなく、多国籍型と同国編重型という少なくとも２つの類型が存在することを明らかにした。貫田・ウリガ（2013）の研究では、機能モデルと異なる結果が見られた。すなわち、出身地の異なる複数の友人が別々の機能を担っているというよりは、むしろ特定の親しい友人が多重的な機能を担っているという結果である。

貫田・ウリガ（2013）は留学生の主観的姿勢から留学生のソーシャル・ネットワークについて検討を行ったが、高社交群と低社交群の分け方について説得性が弱く、分析では高社交群において、英語使用比率がいっそう高いと述べているが、言語能力から社交への影響については言及しなかったといった問題点が指摘できる。

３．２．５　ソーシャル・メディアの利用

携帯電話というメディアの利用と留学生のソーシャル・ネットワークとの関係を見るため、金（2003）は首都圏12校に通っている留学生を対象に質問紙調査をした結果、携帯電話というメディアが、留学生においても利用頻度が高く、主に母語話者とのコミュニケーションに利用されていることは、異文化にいる「同文化の留学生とのネットワーク」の形成、維持に一定の役割を果たしているが、反面、日本人との交流を妨げているという側面があることがわかった。この結果によって、金は携帯電話の高頻度利用は、留学生の一部の人々において、外国人としての孤立を促進する可能性があると指摘している。

金（2003）の携帯電話というメディアの利用による留学生のソーシャル・ネットワークへの影響との研究は、ソーシャル・メディアという手段の役割を示した。実際に、携帯電話のみならず、現在、人々に広く使われているFacebook、Lineなどのソーシャル・メディアの利用による留学生のソーシャル・ネットワーク構築に与える影響についても検討すべきである。これを明らかにすることによって、ソーシャル・メディアの機能を十分に果たし、留学生のソーシャル・ネットワーク構築を促進させる可能性があると考える。

上記の要素別に留学生のソーシャル・ネットワークを検討した先行研究をレビューすることを通して、留学生のソーシャル・ネットワークが留学生の出身、居住形態、来日期間、留学生個人の主観的姿勢、ソーシャル・メディアの利用など様々な要素に影響されていることが分かった。そのほかにも、留学生の在学身分や言語能力、経済状況などの要素も留学生のソーシャル・ネットワークに影響を与える要素と考えられ、留学生のソーシャル・ネットワークを検討する際の避けられない課題として検

討すべきである。

４．ソーシャル・ネットワークの影響要因

前節では要素別に留学生のソーシャル・ネットワークを検討した。留学生のソーシャル・ネットワークは具体的にどのような要因に影響されているのかという点について、数多くの研究が行われており、また、影響要因を検討する際には、量的研究と質的研究の双方が研究手法として用いられてきた。本節では量的研究と質的研究に分けて、留学生のソーシャル・ネットワークの影響要因に関する先行研究をレビューする。

４．１　影響要因に関する量的研究

量的研究の大多数が、質問紙調査を実施し、因子分析を通して影響要因因子を抽出する手法を用いて分析を行う。そのような量的研究として、横田（1991）、田中（1995）、田中（2003）、木村・中込（2003）、湯（2004）、石原（2011）などが挙げられる。

横田（1991）では留学生と日本人学生の友人関係の構築を妨げる要因について因子分析を行った結果、留学生側に五つの因子「日本の慣習」、「言葉の障壁」、「関係づくりへの抵抗感」、「興味なし余裕なし」、「希薄な主張」、日本人学生側に四つの因子「無力な暗黙のルール」、「漠然とした不安と遠慮」、「言葉の障壁」、「興味なし余裕なし」を抽出した。

横田（1991）の結果では、留学生と日本人学生は言語面、個人の趣味や余裕といった要因で共通するが、それぞれ独自の要因も見られた。また、対人関係形成の困難に関する原因認知について、田中（1995）、田中（2003）はそれぞれ留学生と日本人学生に対して調査を行った。

田中（1995）では在日外国人留学生による日本人学生との対人関係形成の困難に関する原因認知を調べ、留学生268人の回答を得て分析を行った。調査では、対人関係困難の原因認知を語学、ソーシャル・スキル、社会的知識、無関心、否定的感情、多忙、個人要因という７項目に分けて、自分側（７項目）と日本人側（７項目）から答えを求めた。14項目に対して因子分析を行った結果、留学生側による「日本人批判」、「自分の知識」、「機械的理由」、「自分の態度」という四因子が抽出された。

留学生側の回答と比較するために、田中（2003）では日本人学生116人の回答を得て、日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較分析を行った。14項目に対して因子分析を行った結果、日本人学生側による「スキルと社会知識」、「日本人の消極性」、「留学生の消極性」、「双方の多忙」、「双方の語学力」五因子が抽出された。

田中によって行われた２件の研究結果から、留学生、日本人学生両者とも自分側と相手側の原因を認めているが、その原因に関する認知にずれがあることが覗える。また、両者で一致している認知は、両者ともに日本人側への原因帰属が高く、交流が進まない原因は、より大きく日本人にあるという現実認識である。その理由について、田中は異文化交流への日本人の苦手意識にあると解釈し、留学生と日本人学生の間で双方向的にソーシャル・スキル教育を行う必要性を指摘した。

上記の研究は留学生全体を一つのグループに取扱って分析を行った。しかし、すでに本稿で述べたように、留学生の出身国によってソーシャル・ネットワークの構成に大きな違いがあり、その影響要因についても留学生の出身国によって異なることが考えられる。湯（2004）、石原（2011）は中国人留学生を取り上げて、その影響要因について追究した。

湯（2004）は在日中国人留学生の対人関係形成の困難の原因及びそれらと適応状況の因果関係を明らかにするために、中国人留学生66名に対して質問紙調査を行った結果、中国人留学生の対人関係形成の困難の原因は、「日本でのソーシャル・スキルの欠損」、「語学能力」、「対人志向性」、「異文化理解」、「アルバイト」と関わっていることを解明した。さらに、留学生が異文化環境での対人関係形成に抱えている困難を解決するためには、湯（2004：312）は、「語学力を高め、ホスト国の行動様式への認識を深めるほかに、とりわけホスト国の人々に対する対人志向性をポジティブ方向へ導くことが重要である」と指摘している。

石原（2011）は中国人留学生の日本人学生に対する友人関係に関する体験の否定的意識はどのようなものかを明らかにするために、119名の留学生に対して質問紙調査を行った結果、友人関係に関する体験の否定的意識は「被差別感」、「対等な協働関係の不成立」、「関係形成の障害」、「交流不全」、「交流スタイルの相違による障害」の五因子から構成されることが示された。

湯（2004）、石原（2011）はそれぞれ中国人留学生の対人関係形成の困難の原因と日本人学生に対する友人関係に関する体験の否定的意識という視点からソーシャル・ネットワークの影響要因を分析した。しかし、２件の研究とも中国人留学生だけを調査対象にして、日本人側から見る中国人留学生とのソーシャル・ネットワークが構築しにくい原因については追究しなかった。留学生側と日本人側からみる影響要因は完全に一様ではなく、留学生のソーシャル・ネットワークを構築させるために大学側から支援策を出す際に両者の要因を十分に検討する必

表１　ソーシャル・ネットワークの影響要因

先行研究	留学生側	日本人側
横田（1991）	「日本の慣習」、「言葉の障壁」、「関係づくりへの抵抗感」、「興味なし余裕なし」、「希薄な主張」	「無力な暗黙のルール」、「漠然とした不安と遠慮」、「言葉の障壁」、「興味なし余裕なし」
田中（1995）	「日本人批判」、「自分の知識」、「機械的理由」、「自分の態度」	
田中（2003）		「スキルと社会知識」、「日本人の消極性」、「留学生の消極性」、「双方の多忙」、「双方の語学力」
湯（2004）	「日本でのソーシャル・スキルの欠損」、「語学能力」、「対人志向性」、「異文化理解」、「アルバイト」	
石原（2011）	「被差別感」、「対等な協働関係の不成立」、「関係形成の障害」、「交流不全」、「交流スタイルの相違」	

要があると考える。

上記の先行研究で明らかにした要因をまとめると、表１になる。

以上の量的研究を概観すると、留学生のソーシャル・ネットワークの影響要因は、留学生に対して日本の文化、言葉の障壁、個人の関心などが多くの研究で言及された。また、阻害要因に注目している研究は多数あることが伺い知れる。しかし、ほとんどの研究は留学生と日本人学生のソーシャル・ネットワークに阻害する要因を検討するものであり、留学生同士の阻害要因について言及されていない。近年の日本における留学生数の急増や留学生出身国の多様化に伴い、留学生同士のソーシャル・ネットワークについても注目すべきである。留学生の構成が多様化になり、留学生の出身国によってソーシャル・ネットワークが異なるため、留学生を一つのグループとして取り扱うことより、多様性を持つ数多くの留学生の特徴に重視し、国別、また留学生同士のソーシャル・ネットワークを考察する必要があると考える。

４．２　影響要因に関する質的研究

一方、質的手法を用いて留学生のソーシャル・ネットワークの影響要因を検討するものとして、山崎（1997）、小松（2013）が挙げられる。

山崎（1997）は留学生と日本人学生間の友人関係成立について考察した。日本に滞在している女子留学生３名に対して面接を行い、留学生が「日本人の友人ができない」という際、二つのケースがあると指摘した。一つ目は実際に友人関係が成立していない場合、二つ目は実際に成立しているが、留学生の考える「友人」には相当しない場合である。また、留学生と日本人学生との友人関係が成立しにくい理由として、「関心の相違」、「半強制的な場の共有時間の少なさ」、「留学生がグループの暗黙のルールについて知らされていない」と挙げている。

小松（2013）では中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成過程について検討するため、中国人女子留学生７名を対象に半構造化インタビュー調査を行い、ＫＪ法によって分析を行った結果、友人形成に積極的な関心を持っていても制度的支援を得られない場合は友人形成に至らないこと、友人形成への関心が消極的であっても、制度的支援を得た場合は友人形成に至っていることが明らかになった。さらに、小松（2013）は、留学生と日本人学生との友人形成を活性化させるためには、留学生自身の積極的な姿勢と大学側の制度的支援体制の整備が不可欠であると指摘している。

以上の２件の研究を通して、留学生と日本人学生の「友人」に対する期待の違いによるキャップの存在、留学生の個人的な関心及び大学側の制度的な支援といった要素が留学生のソーシャル・ネットワークを影響する要因であることがわかる。調査対象者が少人数で一般化できないという限界があるが、個々人の見解まで示されたことは評価できる。留学生のソーシャル・ネットワークの影響要因を解明するためには、量的研究と質的研究の

融合による研究方法を取り入れて検討する必要があると考える。

5．ソーシャル・ネットワークの構築過程

これまでの留学生のソーシャル･ネットワーク研究は、主にその構成や影響要因に集中しているが、構築の過程に関する研究は少数でありながらも、佐々木他（2012）、山川（2012）などが挙げられる。

佐々木他（2012）は中国人留学生がいかに日本人と友人関係を構築しているかについて、来日１年以上の５名の中国人留学生を対象にし、半構造化インタビューを行った。その結果、接触前の認識の存在、留学生側の一方向的な友人関係構築のための努力、知識としての日本の慣習に基づいた様々な工夫、比較対照される中国人との友人関係、留学生側から見た友人関係構築を促す日本人の行動、交流が進まない時の自分の日本人への接し方に関する反省、また友人関係が構築された場合の関係維持の心配などを組み込んだモデルを提示した。中国人留学生側の一方向的な努力について、佐々木他（2012）は対等的、協働的に参加できる教育活動が期待されると指摘している。

山川（2012）は留学生がどのようなソーシャル・ネットワークを形成しているか、またソーシャル・ネットワークを形成することは留学生にとってどのような意味があるかを明らかにするため、日本の大学で日本語を学習している留学生４名に対してインタビュー調査を行った。SCATを用いて一人ずつ分析を行った結果、留学生のソーシャル・ネットワークを形成していく過程が「コミュニティへの参加」、「相手との時間的・空間的共有」、「友人関係構築」、「コミュニティへの所属感」、「自分の居場所」という順になっているとまとめた。また、山川は日本の大学に所属する留学生のネットワーク形成は、受け入れ側大学の留学プログラムに依存している部分が大きいと指摘し、受け入れ側の大学は、提供するプログラムのシステムが留学生のソーシャル・ネットワーク形成に影響を与えているということを認識すべきこと、受け入れ側のシステム、具体的には寮やクラブ、イベントや授業などのあり方などを見直して行くべきであると提言した。

上記のソーシャル・ネットワーク構築過程の２件の研究を通して、留学生のホストとソーシャル・ネットワークを構築するための努力、またソーシャル・ネットワーク構築の過程が明確に示された。留学生のソーシャル・ネットワーク構築の過程を明らかにすることによって、留学生はどの段階でどのようなサポートが必要なのかということが明らかになってきている。しかし、留学生のソーシャル・ネットワーク構築の過程に関する研究はまだ少ないため、その全体像がまだ見えておらず、構築過程に関するさらなる検討が期待される。

6．総括

本稿では、留学生の友人機能モデル、ソーシャル･ネットワークの構成、要素別による検討、ソーシャル・ネットワークの影響要因などの面から在日留学生のソーシャル・ネットワークに関する先行研究の総括を行い、日本における留学生のソーシャル・ネットワーク研究の現状を明らかにした。今後の課題について以下の通り整理したい。

一つ目は、分析の枠組みについてである。これまでの日本における研究は対象を留学生と日本人学生とのソーシャル・ネットワークに限定している。日本においては留学生の出身国は多様になっており、また国際コースの設置などによって英語圏の留学生がさらに増加すると考えられ、留学生同士のソーシャル・ネットワークにも注目する必要がある。多様性を持つ留学生同士のソーシャル・ネットワークを明らかにすることにより、様々な支援策の開発が可能となり、それによって留学生同士のソーシャル・ネットワークの構築を促進させ、大学の国際化にさらに貢献できると考える。

二つ目は、要素別に検討する課題である。貫田・ウリガ（2013）によって指摘されているように、ソーシャル・ネットワークについて留学生の全体的傾向に注目するものが多く、留学生の専攻、経済状況、居住形態、言語能力、在学期間といった要素を区別しながら留学生のソーシャル・ネットワークを分析している研究が少ないことである。これらの要素の違いによって、留学生のソーシャル・ネットワークの構築に影響する要因も異なると考えられ、要素による検討は見逃せないものである。すでに本稿で述べたように、留学生のソーシャル・ネットワークは居住形態、来日期間、留学生個人の主観的姿勢など様々な要素に影響されていることが明らかになっているが、留学生の在学身分や言語能力、経済状況などの要素についても検討する必要があると考える。

三つ目は、先行研究の研究方法に関する問題で、つまり、友人の選出法の不足点である。Bochner et al.（1977）、Furnham et al.（1982）、Furnham et al.（1985）、田中他（1990a）、田中他（1990b）、田中他（1991）などの方法は、調査対象者に単に最も仲の良い友達を10名までを想定させ、質問項目によって想定した友人の中から最も該当すると思われる１名を記入させる手法を取られている。こ

れにより、一つの項目に１名のみを記入させることになり、同項目において「同国人」、「ホスト国の者」、「他の外国人」三グループの比較ができないという欠点がある。そのため、同項目において「同国人」、「ホスト国の者」、「他の外国人」三グループの比較を行うため、調査方法の改善が求められる。

四つ目は、留学生の出身国ごとに検討する必要があることである。先行研究の対象者を概観してみると、日本における留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究は中国人留学生、アメリカ人留学生を対象に行われてきたが、そのほかの国についての研究はまだ見られていない。これについて、村上（2005）でも留学生とホストとの関係は、留学生が居住する国や多様化した留学生の属性を無視して論じることが難しいと指摘している。また、日本では中国人留学生の割合が最も高いが、中国人留学生を対象にした研究は木村・中込（2003）、湯（2004）、戦（2007）、石原（2011）、佐々木他（2012）、小松（2013）によるものしかない。以上に提示した課題を踏まえ、さらに中国人留学生を対象にして検討する必要がある。

留学生は母国を離れ、新しい環境で自分のソーシャル・ネットワークを再構築しなければならない。留学生に順調に自分のソーシャル・ネットワークを構築させるためには、大学からの有効な施策が求められる。留学生のソーシャル・ネットワーク及びその影響要因を明らかにすることによって、大学関係者に有益な示唆が与えられると考える。また、大学のグローバル化を求められている現在、留学生のソーシャル・ネットワークを検討することによって、留学生同士、留学生と日本人学生の間の壁をなくし、円滑に交流を行わせることは、大学におけるミニ国際社会の構築にも拍車をかけることになるであろう。

参考文献

Blake,H., Devan,R., & R. Kelly Aune.（2011）An analysis of friendship networks, social connectedness, homesickness, and satisfaction levels of international students. International Journal of Intercultural Relations, 35（3）, pp.281-295.

Bart.R. & Eimear-Marie.N.（2014）Understanding friendship and learning networks of international and host students using Longitudinal SccialNetwork Analysis. International Journal of Intercultural Relations 4, pp.165-180.

Bochner,S., Mcleod,B., & Lin, A.（1977）Friendship patterns of overseas students: A functional model. International Journal of Psychology, 12（4）, pp.277-294.

Dewey,D., & Ring.,S.（2011）Social network development during study abroad in Japan, Presented paper at The Association of Teachers of Japanese annual conference. Hawaii.

Furnham,A. & Bochner,S.（1982）Social Difficulty in a foreign culture: An empirical analysis of culture schock. In: Bochner, S,（eds.）Culture in Contact: Studies in cross cultural interaction. pp.161-198.

Furnham,A. & Alibhai,N.（1985）The Friendship Networks of Foreign Students: A Replication and Extension of the Functional Model. International Journal of Psychology, 20（3-4）, pp.709-722.

石原翠（2011）「留学生の友人関係における期待と体験の否定的認識との関連―中国人留学生の場合」『異文化間教育』34号　異文化間教育学会　pp.136-150.

江淵一公（1991）「在日留学生と異文化間教育」『異文化間教育』５号　異文化間教育学会　pp.4-20.

木村玉己・中込美賀子（2003）「中国人留学生と日本人留学生にみる行動認知差分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第51巻　pp.285-288.

金相美（2003）「携帯電話利用とソーシャル・ネットワークとの関係―在日留学生対象の調査結果を中心に―」『東京大学社会情報研究所紀要』65号　東京大学社会情報研究所編pp.363-394.

工藤和宏（2003）「友人ネットワークの機能モデル再考―在豪日本人留学生の事例研究から―」『異文化間教育』18号　異文化間教育学会　pp.95-108.

久野弓枝（2011）「留学生が抱える不安や問題とそのサポートについて―札幌大学の留学生に対する質問紙調査とインタビュー報告―」『札幌大学総合論叢』第31号　pp.55-74

小松翠（2013）「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第12号　pp.71-86.

佐々木泰子・張瑜珊・鄭士玲（2012）「中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究」『異文化間教育』35号　異文化間教育学会　pp.104-117.

戦旭風（2007）「友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係」『留学生教育』12号　留学生教育学会　pp.95-105.

高井次郎（1989）「在日外国人留学生の適応研究の総括」『名古屋大学教育学部紀要』教育心理学科36　pp.139-

147.
高井次郎（1994）「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』８号　異文化間教育学会　pp.106-116.
田中共子・高井次郎・神山貴弥・村中千穂・藤原武弘（1990a）「在日外国人留学生の適応に関する研究（１）―異文化適応尺度の因子構造の検討―」『広島大学総合科学部紀要』Ⅲ　第14巻　pp.77-94.
田中共子・高井次郎・南博文・藤原武弘（1990b）「在日外国人留学生の適応に関する研究（２）―新渡日留学生の一学期間におけるソーシャル・ネットワークの形成と適応―」『広島大学総合科学部紀要』Ⅲ　第14巻　pp.95-113.
田中共子・高井次郎・南博文・藤原武弘（1991）「在日外国人留学生の適応に関する研究（３）―新渡日留学生の半年間におけるソーシャル・ネットワーク形成と適応―」『広島大学留学生センター紀要 』（１）　pp.77-95.
田中共子・横田雅弘（1992）「在日留学生の居住形態とストレス」『学生相談研究』13（２）　pp.51-59.
田中共子（1995）「在日外国人留学生による日本人との対人関係の困難に関する原因認知」『学生相談研究』16（１）pp.23-31.
田中共子（1998）「在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から」『教育心理学年報』Vol.37　pp.143-152.
田中共子（2000）『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
田中共子（2003）「日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較」『学生相談研究』24　pp.41-51.
湯玉梅（2004）「在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究―対人行動上の困難の観点から―」『国際文化研究紀要』10　横浜市立大学　pp.293-328.
貫田優子・ウリガ（2013）「在日外国人留学生の社交性と交友ネットワーク ： 大阪大学・京都大学の外国人留学生を対象としたアンケート調査から」『日本語・日本文化』39号　1-23　大阪大学日本語日本文化教育センター
新倉涼子（2000）「チューターと留学生の友人関係の形成と性格の特性や行動に関する相互認知」『異文化間教育』14号　異文化間教育学会　pp.99-116.
古川雅文・藤原武弘・井上弥・石井真治・福田広（1983）「新環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達的研究」『心理学研究』53　pp.330-336.
松下達彦（1999）「留学生のためのソーシャル・サポートと日本語教育―教室外環境と教室内環境の融合を目指して―」『留学交流』1999年12月号　pp.16-19.
村上律子（2005）「アメリカ人留学生のソーシャル・ネットワークとホストとの親密化
―支援制度による接触を中心に」報告書『外語大における多文化共生：留学生支援の実践研究』
山川史（2012）「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』38号　異文化間教育学会　pp.100-115.
山崎瑞紀（1997）「留学生と日本人学生間の友人関係成立に関する一考察」『学術研究.（教育心理学編）』早稲田大学教育学部　pp.37-42.
横田雅弘（1991a）「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』５号　pp.81-97.
横田雅弘（1991b）「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105（５）　pp.629-647.
横田雅弘・田中共子（1992）「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク：居住形態（留学生会館・寮・アパート）による比較」『学生相談研究』13（１）pp.1-8.

A Review of Social Network Studies for International Students in Japan

Wu Xiaoliang

The construction of friendship networks is closely related to intercultural adaption for international students, and has become an important topic with the increase of international students in Japan. The purpose of this study is to clarify the current state of affairs and identify potential future trends in relation to the friendship networks made by international students in Japan through discussing prior studies into the functional model of friendship patterns, friendship networks and factors that influence friendship networks. The results show that functional models of friendship patterns vary depending on, amongst other considerations, the nationality of international students, nationality of their friends, and study abroad destination. Moreover, there are various factors that influence friendship networks; it is not only related to international students themselves, but also the host country where the students stay. Based on the findings, recommendations have been made for future studies concerning research objectives, classification of objectives and research methods.